

10月第1週の礼拝説教

■日 時：2025年10月5日（日）10：30～11：30 聖靈降臨節第18主日礼拝

■説 教：保科けい子牧師

■聖 書：新約：マタイによる福音書19章13～30節（新約P37～38）

■説教題：「天に富を積む」

■讃美歌：2（聖なるみ神はわれらの集いに）

510（主よ、終わりまでしもべとして）

今回の説教は、ある方が「AI」で録音し、その日のうちに文章化してくださった原稿を、書き言葉で少し整えています。初めての体験でした。私は原稿を用意しそれを元に語っていたと思っていたのに、こんなに冗長にアドリブで語っていたのか、ということを思い知られました。穴があったら入りたいと思いながら、書き言葉として以下のように整えてみました。

昨日の土曜日の夕方、夫が急に前日から歯が痛みだしたので、無理を言って診察をしてもらった歯科から帰宅しました。そして、治療してくださった女性のドクターから「『こんなに次々に病気になっているのだから、お祓いでも受けたらどうですか』と笑いながら言われたよ」と報告してくれました。それは、6月ごろからなんとなく声帯に不安があったので7月に検査をし、8月初めに腫瘍が見つかったこと、その後間もなく肋骨の骨折をしたこと、8月25日に声帯の手術をし、その結果は悪性の喉頭がんだと9月の初めに分かったこと、それに続いて内視鏡で範囲を広げて検査をしていたら十二指腸潰瘍まで見つかったこと、それは肋骨を骨折した時に痛み止めをいただいたので、それを几帳面に28日分飲んだことに関係があると私は思っています。そして、今度は来週の10月6日から声帯への放射線の照射治療が始まるのです。声帯ですから広範囲に組織を取ってしまうと声が出なくなってしまうので、放射線でたたくということでした。それに加えて、照射前の歯科検診では異常なしでしたが、先週の10月3日から上の奥歯が痛みだして、急速、かかりつけの歯科に行きました。その時に女性のドクターから「こんなに次から次から病気が出てくるんだから、お祓いを受けたらどうですか」と言われたようです。私はそれを聞いて「妻は現役で今もお祓いをする側ですよ」と話したらよかったですのにと言い、二人で笑いました。「お祓いでも受けたらどうですか」というドクターの声がけは、やはりある程度の信頼関係が築けていないとできないはずです。そして、実はその言葉は30数年前に、小児科のドクターからかけられた言葉と同じだったので、二人で笑ってしまったのです。30数年前に富山県の高岡市にいたときに、子どもたち3人が非常に重症の喘息発作を起こすようになりました。その中でも、長女は酸素テントに入ったり、人工呼吸器を装着したりしてやっと命拾いをしたというぐらいに重症でした。かかりつけの市民病院の小児科病棟の3人部屋を我が家のお供3人で占拠していたという時期がありました。その時に、親身になって真夜中でも早朝でも回診にきてくださったドクターがいました。そのドクターが、長女が人工呼吸器で一命を取り留め症状も一段落したとき、「お祓いでも受けたらどうですか」と笑顔で言われたのです。もちろんそのドクターは、夫がその町にあるキリスト教会の牧師であり、私も子供たちも洗礼を受けていることをご存知だったわけですけれども、そういうお声がけをなさったのです。つまり、峠を越したので大丈夫ですよ、という意味で「お祓いでも受

けたらどうですか」と微笑まれたのです。昨夜はそのことを思い出しながら、本日の聖書箇所をずっと読んでいて、19章26節の「それは人間にできることではないが、神は何でもできる」という御言葉を、改めて深く噛みしめました。

さて、本日の聖書箇所は日本基督教団の聖書日課から取り上げている19章の13節から30節までの御言葉です。主イエスが子供を祝福される場面、金持ちの青年との対話、そしてその後の弟子たちとの対話が記されています。大勢の群衆に取り巻かれながら、主イエスは人々の病気を癒し、教える御言葉を語られていました。「そのとき、イエスに手を置いて祈っていただくために、人々が子供たちを連れて來た」と、本日の箇所は始まっています。つまり、あの人はどうも手を置いて病気を治すらしい、確かに治った人がいる、素晴らしい話をする、というように、主イエスのことが近隣に伝わっていたのだと思います。ですから、頭に手を置いて祈っていただくと子供が元気に育っていくのではないか、と願う人たちが子供たちを連れてきたわけです。その時に、大勢の群衆に取り囲まれている主イエスをボディーガードのようにして守っていたのが弟子たちだったのです。13節に「弟子たちはこの人々を叱った。」と記されています。このような多くの人々の中に小さい子供を連れてきては子どもが押しつぶされてしまうかもしれない、子どもには主イエスの話などわからないのだから連れてくるな、という思いがあったのかもしれません。しかし、14節を見ると、主イエスは「子供たちを来させなさい。わたしのところに来るのを妨げてはならない。天の国はこのような者たちのものである。」とおっしゃいました。この主イエスの御言葉は、主イエスの本質をよく示している優しさのあふれた言葉であり、多くの人々に愛されています。そして特に、幼稚園や保育園、あるいは教会学校などで「イエス様は小さな子どもたちをとても喜んでお招きになって、祈ったでしょ」というような話をします。

そして、そのような主イエスの子供たちに対する接し方を描いた直後に、「金持ちの青年」という話が出てくるのです。この話は、小見出しの下の括弧を見ていただくと、マルコによる福音書もルカによる福音書も同じような順序で取り上げていることがわかります。子どもを祝福するという場面でひと悶着がありました。その後に、一人の男が主イエスに近寄って来て「先生、永遠の命を得るには、どんな良いことをすればよいのでしょうか。」と言ったのです。後の箇所を見ると、この男は金持ちの青年であって、たくさんの財産を持っていましたことが分かります。しかも、当時のユダヤ教が支配していた社会で、この青年は十戒に代表されるような律法、つまり、捷を忠実に守っていたようです。「もし命を得たいなら、捷を守りなさい」と主イエスが語られた時に、男は「どの捷ですか」と尋ねます。そうすると、主イエスは「殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、父母を敬え、また、隣人を自分のように愛しなさい。」と、十戒の中の有名な捷を挙げられました。当然のことながらこの青年は、「そういうことを皆守ってきました。まだ何か欠けているでしょうか。」と答えました。自分はそういうことは一生懸命に守ってきた。それ以上にできないぐらいだというふうに自負を持っていたんだと思います。そこで、主イエスは何と語られたかというと、「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。そ

れから、わたしに従いなさい。」と勧められました。この「天に富を積むことになる」から本日の説教題を取っています。ここで主イエスは、「わたしについて来たいのであれば、従つて来たいのであれば、」ということを、「もし完全になりたいのなら」という言葉で言い換えています。そして、「こういうことをしなさい」という条件をはっきりと示されました。

主イエスの弟子はご存知のように、最初の4人はガリラヤ湖の漁師たちでした。ガリラヤ湖畔で主イエスは彼らに、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」とだけおっしゃったのです。この漁師たちが主イエスに従おうとするならば、ガリラヤ湖という場所を捨て、網を捨て、舟を捨てなければなりません。そのようにして彼らはすぐに従った、と聖書は語っています。一方、ここでの青年は、「行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。」と主イエスから条件を提示されています。このことは、その青年にとってどういうことだったのでしょうか。彼は立っている場所がある、財産もたくさんある、おそらく立派な住まいもある、律法に照らし合わせても欠けることのない宗教的な知識もある、けれどもそういうものを全部捨てなさい、という厳しい勧めでした。私たちはこの言葉を聞くときに、私たちは果たして何を売り払って主イエスに従っているだろうかということを問われます。私たちの多くは、「わたしに従いなさい」という御言葉に従っているわけですけれども、全財産を売り払ったわけではありません。それを、愛のわざに用いていただくように全部寄付してしまったということでもありません。自分自身の日々の生活を捨ててしまったというわけでもありません。そういうことを考えさせられながら、この箇所は様々な解釈がなされてきたということを思い出しました。この青年のように、主イエスの言葉を一字一句正直に受け取る必要はない、主イエスはここで厳しい言葉で語っておられるが、ここで最も大切なのは全財産を施すことではなくもっと別のことであって、私たちはそれをここから読み取ればよいのだというのが、一番私たちにとって納得できるような解釈かもしれません。それは、主イエスの御言葉を聞きつつも、自分の都合の良いように言い逃れの道を探って、その中で、いわば妥協点を見つけて生きていく生き方かもしれないのです。それが、私たちがこの世の中で生きていく上での、いわば一人のキリスト者として波風を立てずに世の中とうまくやっていこうという一つのあり方かもしれません。ですから、この主イエスの御言葉「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」をそのままに実行しなさいというのであれば、それは私には無理である、と最初から思っているわけです。そんなことをしたら、私はこの世の中ではつまはじきにされてしまって生きていくことはできない、と思うわけです。

ところで、ここで「完全になりたいのなら」と言われている「完全」という言葉は、マタイによる福音書にもう一箇所出てきています。「山上の説教」の中の5章48節に、「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」とあります。では、「完全」とは何でしょうか。5章45節にこうあります。「父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである」と記されています。それが神の恵みの完全さというふうに言うこともできるかもしれません。悪人にも善人

にも太陽を昇らせ、正しいものにも正しくないものにも雨を降らせてくれる、そういうお方のところに、すなわち、天に富を積むことになる、だから「わたしに従いなさい」、と主イエスは語っておられるのだと思います。ところが、青年はこの言葉を聞いて「はい、わかりました。私はそのようにします」とは言えなかったのです。私たちもいろいろなものがある意味持っています。そこで、私は神学校に入る時に召命觀ということを尋ねられたことを思い出しました。その時に、本当に心が騒いだのを覚えています。私が持っているもの全部を捨てて、主イエスのみに従ってこれから歩んでいけるだろうかと思ったのです。その時に、いや、私がもしも途中で挫折した時に、なんとか立ち直れるようなものを少しだけは残しておいた方が良いのではないか、と思ったりもしました。夫の親友にカトリックの司祭になった方がおられて、カトリックの修道志願の中身はもっと厳しいものがある、ということをお聞きしたことがあります。何度も誓願を立て続け、繰り返し神様からの召しを確認し、それに応えるために本当に持っているものを全部捨てて修道院に入っていくのだそうです。そういう時に、何かの時のことを考えてちょっとだけ残しておこうと考えると、それは完全ではないわけです。完全になりたいと思っているのに、私たちにはその道が示されているのに、もしもの場合も考えて、これも取つておこう、あれも残しておこう、と思うのです。そのようなことを考えると、「天に富を積む」というのは一体どういうことだろうか、私たちは自分の力で天の国に富を積むことができるだろうか、その富というはどういうものだろうかと悩んでしまいます。私たちの目には天の国が見えないわけですから、そこに積む富などというものはましてや見えません。しかし、私たちは日々の歩みの中で、本当に小さな小さな富を積んでいるかもしれません。そのことも私たちは見えません。けれども、天に積むという富があることを信じて歩む、そういう生き方が私たちには示されている、そのことをここでご一緒に考えていきたいと思います。そのことは、次の段落に記されている24節の「金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」というたとえのように、私たちには本当に無理なことかもしれません。けれども、私たちの目に見えないところで、私たちのために十字架にお架かりになり、天の国に私たちのために富を積んでくださるお方がいる、そのことを私たちは本当に信じ、その方に少しでも倣うようにして歩み続けていきたいと思います。お祈りします。

主なる神様、イエス・キリストは幼子のようなものが天の国に入るとおっしゃいました。私たちは幼子のようなものではありません。様々なものが私たちには絡みついています。しかし、私たちが本当に目に見えないものに目を注ぎ、そして、主イエスが神様の右に座し、私たちのわずかな富をも見捨てず積み上げてくださっている天の国に思いを馳せる時に、私たちの歩みも、本当に目に見えないものを信じて歩む、そういうところへと近づくことができるのかもしれません。そのような歩みを目指して、私たちが日々を丁寧に過ごしていくことができるよう、どうぞ導いてください。今日ここに様々な事情で集い得ない方々をも、あなたが目を留め祝してください。この祈りを主イエス・キリストの御名によっておささげいたします。アーメン。